



TITLE:

シュレーデルの「漁業經濟論」に就いて

AUTHOR(S):

岡本, 清造

CITATION:

岡本, 清造. シュレーデルの「漁業經濟論」に就いて. 經濟論叢 1931, 33(4): 618-625

ISSUE DATE:

1931-10-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130084>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號四第

卷三十三第

行發日一月十年六和昭

論叢

公私混合營業

法學博士 神戸正雄

英國の重農主義者

經濟學博士 堀經夫

マルクス地代論の解釋

文學博士 高田保馬

時論

滿蒙爭議の實相

經濟學博士 作田莊一

研究

金數量説に就いて

經濟學士 松岡孝兒

ゼーリング教授の農業恐慌論

經濟學士 靜田均

住居統計に就いて

經濟學士 岡崎文規

說苑

育子教諭書について

經濟學博士 本庄榮治郎

商品勘定の損益分記法

經濟學士 小菅敏郎

助郷不勤滞金の處分

經濟學士 黒羽兵治郎

シユレの「漁業經濟論」に就いて

經濟學士 岡本清造

纖維工業と勞働

經濟學士 菊田太郎

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

（禁轉載）

經濟學發展史の一資料としやうと思ふ。

緒て、歴史的・社會的存在たる人類の經濟生活を研究の對象とする經濟學は三つの研究部分——理論・歴史及び政策——を有つ。經濟生活の一部門たる水産經濟を研究するに於ても、斯の三者は相共に進めらるべき研究部分である。

併し、この三研究部分が如何なる認識論的基礎の上に統一せらるべきか、將又それら相互の關係は如何にあるべきか等の研究は今姑く措き、茲には唯この舊き漁業經濟論が斯かる三研究部分の孰れを採つたか、又其の所論を如何に導き來つたかを探ね、併せてその研究の歴史的背景に一瞥を加ふることによつて、水産經濟の研究上尙ほ補足すべき研究部分を呈示する範圍に止める。

二

「漁業經濟論」の内容を外廓的に窺ふに、全體は二部に分れてゐる。その第一部に於て、著者は(A)漁業の本質

シュレーデルの

「漁業經濟論」に就いて

岡本清造

如何なる學問たるを問はず、その現實の歴史は後學に研究の方向を指示し、問題の所在を教える。蓋し、人間の理論追究の意思は學問發展史の中に具現してゐるからである。されば、假令その發達が遅れ未だ學的體系を備ふる迄には至つてゐないと言はるゝとも、水産經濟論の歴史を反省することは、やがてこの領域に於ける研究課題を捉へ、これが研究を進むるにつきて多くの示唆を與へるであらう。斯かる意味に於て私は以下この研究領域に於ける舊著¹⁾——著者自らの言によれば國際文献中最初のもの——を紹介批判して、水産

1) Eduard August Schroeder, "Fischerei-Wirtschaftslehre der natürlichen Binnengewässer" 1889. Dresden.

を探りこれを分類し、漁業經濟論の課題を定めその科學上の地位を規定し、これに附説として(B)可成りの頁數を中歐の淡水魚類學研究に費やし、その第二部——この著の本質的部分を成してゐると見るべき部分であるが——に於て、(A)國民經濟全般との關係に於て漁業を論じ(B)前に分類規定したる自然的淡水漁業の經濟論を試み(C)これを基礎として漁業政策論を展開して(D)併せて漁業法の説明を加へてゐるのである。而してこの「漁業經濟論」序説によれば、本著が「自然的淡水漁業をその急速なる衰頽に委棄すべからざる限り、漁業特に淡水漁業に經濟的及び法律的秩序を賦與する必要があるに大である」といふ點に立脚し、「從來等閑に附せられたるこの國民經濟部門の研究領域に於ける國際的文献の最初のものとして、これを理論的に取扱ひ一の特殊科學の建設にまで進まむとする」²⁾意圖の下に書かれたものであることが明かである。

著者によれば、漁業はその本來の性質に於ては人間の野生動物——水を以てその絶對的生活要素とする動物——の捕獲以外の何ものでもなく、³⁾従つて播種することなき收穫者⁴⁾は最も辛勞の少き收益源泉からの容易なる收穫たる特質を有つ。他面人類に斯の如き收穫を齎らす水界即ち漁場は、自然的な未だ荒廢せざる状態に於ては人間に *Naturernt* を提供する諸他の經濟部門中最も生産的なものである。⁶⁾次に著者は、國民經濟的意義に於ては漁業は之に關する凡ゆる經濟的・技術的及び法律的關係を包括するとなし、これを漁業活動の行はるゝ水界が自然の儘なるか又は人工の加はりたるものなるかによりて、自然的漁業 *eine natürliche od. wilde F.* と人工的漁業 *eine zahme od. künstliche F.* とに大別し、前者を更に遠洋漁業沿海漁業及び淡水漁業の三者に區別してゐる。「漁業經濟論」はその研究の範圍を就中自然的淡水漁業に限つてゐるのであるが、このことは獨乙の漁業諸部門中淡水漁業の有つ重要性に鑑みれば自ら理解される所である。

自然的淡水漁業は自ら幾多の視野の下に觀察せらるべき固有の課題を多數有つのであるが、著者は、從來

2) Vorwort.

3) 4) 5), "Fischerei-Wirt." S. 1.

6) "Fischerei-Wirt." S. 61.

評價せらるゝことの極めて低かりしこの國民經濟部門に法律的基础を賦與してその合理的な發達を助くることと、淡水漁業と爾餘の國民經濟部門との利害の衝突を國民經濟全體の利益の下に一致せしむることとが、實に淡水漁業經濟論上の課題の重要なものと見てゐる⁷⁾。更に彼は漁業經濟論は實際經濟論 *die praktische Volkswirtschaftslehre* の一分科として次掲の三方面からの研究を必要とすると論じ、その各方面に於ける課題を導き出してこれに説明を加へてゐる⁸⁾。本著第二部は正に斯くして數へ上げた課題の研究に他ならぬ。

經濟的關係に於ては、合理的の利用による水界の永續的收益力の研究、この收益力を増進せしむるために可能なる手段の探究、漁獲物の經濟的な販賣及びその重要々件たる貯藏と輸送とに關する經濟的觀察がなされねばならぬ。殊に經濟的關係に於て重要視さるべき問題は漁業に適切なる團體組織の問題である。

技術的關係に於ては、淡水魚類の生活を水界の特性との因果關係に於て研究すること、魚類をその害敵より庇護しその有用物の増殖を促進し、さらに抵抗力の劣弱なる仔幼魚魚卵の安全を確保してそれらの成長を安固ならしむるた

めの凡ゆる手段方策を攻究することが必要である。

最後に法律的關係に於ては、單に私法關係のみならず、漁業の伸張を計らむとする國民經濟上の要請に出づる公法も亦研究すべく、併せて刑法・漁業警察並びに國際法も研究する必要がある。

斯く三方面からの觀察を必要とする所以は、著者が漁業(經濟)論を以て當然國民經濟政策論の一たるべきものと認めたるによるのである。即ち、それが科學性を要求するためには理論經濟學の上に打ち建てられねばならぬが、同時に又技術的領域にまでもその研究を進めねばならぬ。漁業(經濟)論に於ける技術的研究は單に物質的・特に科學的生産の技術のみでなく、これら技術を能く經濟的原則に適應せしむるためには更に魚類學や水産植物學にまでも進みて研究せねばならぬ。他方漁業論に於て法律の研究せられねばならぬ必要は、法律が凡ゆる社會的構造を貫いてゐるからである⁹⁾。

如上の諸分野の研究が完全となるに於て、始めて漁業論は一の獨立性を保有し、一の特殊學科となるのである。

以上は、著者が漁業論若くは彼がより適切なる表象と認めたる漁業經濟論を基礎づけむとした理論的構想の概要である。私は本稿はしがきの理由により、彼の

7) 8), "Fischerei-Wirt." S. 6-7; S. 53.

9) S. 7-8.

この説明を批判することは茲に姑く措き、斯の如き政策的な漁業論を導き出した彼の考へ方に就いて今少しく立入つて考察して見やうと思ふ。

三

漁業の經濟を説く部分に於ても、彼の所論は畢竟利用經濟論の範圍を出でてゐない。従つて動もすれば技術的研究と自然科学的研究とに墮する傾向あるを免れぬ。彼の漁業經濟論なるものは、漁業に於ける經濟

Wirtschaft と企業 Unternehmen との區別及び前者より後者への發達から導かれてゐる。即ち、彼によれば、この區別は私經濟に於ても國民經濟に於ても相共に妥當する觀念で、國民の經濟的進歩は規模大にして且つ永續的な一の國民的企業より生れ出で、單なる資本維持に努むるのみにしてその收果が全部經營者の慾望充足に消盡せらるゝが如き漁業活動に代ゆるに、新資本形成のための剩餘を残すべきより大なる收果を追求するが如き漁業活動を以てすることが即ち漁業の發達を意

シユレーデルの「漁業經濟論」に就いて

味するのである。¹⁰⁾ 次で著者は、この發達を第一に水界利用の方面より、第二に斯かる利用方法を促進する手段の方面より、夫々考察してゐる。

第一に水界の利用に就ては、専ら水界の生産性に關して寧ろ自然科学的な研究が進められてゐる。人類はその漁業活動に於ては水界より *Nahrung* を獲るのであるが、斯かる利用方法は更に進みて自然的生産狀態を積極的に人工を加へて生産する企業にまで進むこと、又現に淡水漁業に在つては斯の如き代位の目前に迫つてゐることを指摘し、¹¹⁾ 次に企業的な利用の基礎要件は水界の物質的新陳代謝現象の研究によつて科學的知識として我々に與へられると述べてゐる。即ち「水界は多種多量の有機物に富んでゐるが、自然のこの仕事場は最も經濟的である」¹²⁾ が故に、「我々は自然の行爲から學ばねばならぬ。」とて、企業的水界利用の基礎を自然の經濟 *Oekonomie der Natur* 若くは水界の經濟 *Haushalt des Wassers* の表現の下に説明し、「この物質的代謝によつて水界は自然の導く儘に獨自の經濟を

¹⁰⁾ S. 51-52.

¹¹⁾ S. 61.

¹²⁾ S. 70.

營み、人類の利用のためには唯々存在することのみを以て足り、斯くて自然的陸内水域は *Naturent* を最も多量に人類に供するものである。¹⁴⁾と論じてゐる。次に斯の如き自然の經濟の教ゆる所は、水界の生産性の保持増大にとりて水産植物の極めて有用なること、又水界生産性の育成の技術の確立が重要な意義を有することにあるとし、この研究結果の實現即ち水界の企業、的利用（科學的合理的利用）が有つ收益力を、一の理想的な正常的漁區經營の收支計算を表示して明かならしめてゐる。¹⁵⁾

第二に、斯くの如き企業的な利用を完成せしめむが爲めには、漁業に關する人類の活動を一定の統制の下に置き、如上の自然の經濟の要請に經濟的に最も適したる條件を創成することが必要であるとし、この問題の考察に當つて、漁業者の團體組織の問題及びこれと關聯して漁區の創設 *Revierbildung* と漁政區劃 *Verwaltungsggebiete* との問題に説明を與へてゐる。殊に漁業者の團體組織が問題とせられねばならぬ理由を次の如

くに説いてゐる。即ち、一定の水域が全般的に育成的な利用に向つて開放せらるゝに非ずんば、換言せば一定の水域上の全漁業者（若くは全漁業權者）がその個人的利益を同時に全體的の利益として表明することなくば、自然の經濟の教ゆる合理的な利用により收益を増大せしむることが不可能であるからである。¹⁶⁾次でこの漁業者の團體組織に關して、彼は經濟組合 *Wirtschaftsgenossenschaft* と強制組合 *Zwangsgenossenschaft* の二型あることを述べ、その實際上の適用に關して各々の長短を比較考察してゐる。¹⁷⁾

四

以上は彼の漁業政策論の基礎的説明を成せるものと見られるが、政策を内容とせる部分に於ても漁業に關する技術的研究を重んずべきことを繰り返し強調してゐる。その理由は、彼によれば、自然的淡水漁業が現時に至る迄經濟生活の研究に於て繼子扱ひを受け來りたるため、漁業經濟論が取り上げて解明すべき技術的

14), S. 61.

15), S. 65-72. (Bilanz einer rationalen natürlichen Fischerei-Einzelwirtschaft im Berechnung der Ergiebigkeit einer idealen Normalrevieren.)

16) S. 72-73; 17) S. 73-77

方策と政策的認識とは頗る多岐廣汎に亘らねばならぬのみならず、多くの方向に於て技術論が自然的淡水漁業の純技術の完成を實現すべき經濟的要件をも指示するが故に、技術論が同時に又漁業經濟論たらねばならぬからである。かくして彼は自然的淡水漁業の技術に關する理論は、これを(一)凡てのものが如何にあるかを説明する基礎的な記述的部分と(二)如何にあるべきか又如何になすべきかを探究し教示する規範的若くは政策的部分の二者に分れるとし、而して前者は單に如何にして水族が採捕せらるゝかを示すに止まらず、科學的概論、即ちその知識なくしては自然的漁業に於ける成功や進歩は全く考へられない魚類學及び更に水界の特性とその利用を魚類學的知識と關聯せしめてなす所の觀察、並に技術の對象とその存在の場所との因果關係の研究等を併せ有たねばならぬとし、後者は有害物の除去に關する經濟的の施設と企業的の施設との二部を有つが、この第一部は人類及び動物による有害行爲を排除することを、又第二部は一方に於て有害なるもの

シュレーデルの「漁業經濟論」に就いて

を廢止すると共に他方に於て漁業に有利なる行爲と制度とを樹立することを内容としなければならぬ、と説いてゐる。この序説に續いて彼は淡水界をその特性によつて分類し、次で産卵保護區、護岸工事や治水工事等と漁業との關係、禁漁期、禁漁場、掠奪的酷漁、魚敵、水產植物の栽殖、工業の有毒排水に對する清淨池設置、農業用灌溉と漁業との關係、魚道魚梯の設定、魚類の人工的保育、漁獲物の販賣、貯藏及び輸送等につきて論述してゐるのである。

最後に法律的關係に於ては、漁業經濟論は漁業權の公正なる行使を實現する施設をその主題とするとなし、漁業權に就いて考察し、私法上當時特に問題となれる漁業權者の岸地立入權 *Uferrecht* の性質を明かにし、又公法關係に於ては自由漁業廢止とそれに伴ふ慣行權喪失賠償の問題を論じ、次で行政法・漁業警察並びに刑法と漁業との關係を説き、最後に漁業に關する國際法に言及し、當時なほ國際間の協定を要する事項の多きに鑑み、自然的淡水漁業の國民經濟的組織は

次代の國際協約の締結に俟つべきもの甚だ大なるべきことを述べて、その結言としてゐる。

五

以上シュレーデルの「漁業經濟論」の概要を紹介したのであるが、それによつて明かなるが如くに、彼の「漁業經濟論」は正に漁業政策論であり、其の個々の方策を誘導し基礎づけたる所は正に利用經濟論である。即ち「漁業經濟論」は漁場（淡水界）利用論の上に立てられたる政策論たる性質を有つのである。このことは當時の獨乙の淡水漁業の情勢を明かにすれば理解し得られる所である。惟ふに、獨乙に於て淡水漁業の重要視せらるゝ所以は、その自然的地理條件の然らしめたる所たるのみならず、¹⁹⁾ 交通輸送の便の未だ開けざりし時代に於ては、舊敎の習慣によつて支持せられたる魚類の需要は主としてこれを淡水漁業によつて充たさねばならなかつたからである。偕て斯くの如く重要視せられたる淡水界の漁業的利用は、當地の利用方法に適應

したる秩序を或は法令により、或はギルド、ツンフト等の統制によつて維持せられたのであるが、一八四八年の法律によつて中世的な漁業秩序は全く破壊せられ、漁業は商品生産の形態に於て活動の自由を與へられ、その結果として屢々掠奪漁撈の弊に陥り、水族の棲存量の減退を招いたのである。加之、爾餘の産業、例へば農業、化學・土木工業等の進歩も亦更に漁場の生産性低下の傾向を促したること少くはなかつたのであるから、漁場愛護の必要、淡水界の生産性の保持増進の必要は獨乙淡水漁業界一般の認むる所であつたのである。他方十九世紀の中葉より特に著しく發達したる自然科學的研究及びその結果を應用すべき技術的研究は、淡水漁場にも進み入りて或は漁場の生産性に關する精確なる知識を獲得せしめ、或は水産増殖の技術を樹立せしめて、淡水漁業界一般に必要とされたる問題の解決に技術的な鍵鑰を呈供したのである。シュレーデルが「漁業經濟論」に於て研究したる所は、既に彼の序論に明かなるが如く、全く當時の情勢に應じたものと評

19) Dr. Ernst Friedrich :—"Allg und Spez. Wirtschaftsgeog." 1926. S. 90.

すべきである。十九世紀七十年代及びそれ以後に於て發布せられたる獨乙各聯邦の漁業法令は、淡水漁業界が自ら問題としたる所の新なる技術の發達に適したる新なる漁業社會の秩序づけであるあると見るべきであるから、彼の「漁業經濟論」も亦斯かる新漁業法制の樹立に専ら利用經濟的な方面から説明を加へたものであると稱すべきである。

彼以後に於ても、獨乙學者の漁業論若くは漁業政策論は殆どシュレーデルの「漁業經濟論」と其の軌を一にし、爾來この領域に於ける研究は自然科學若くは技術的研究を除いては特に顯著な進歩を示したと言ふことを得ない。例へば Büchenberger, Schwappach, Brühl, Schiemenz, Fritzsche, Haager 及び Haempel 等の論著（茲にはその表題を略す）を見よ。私が此等論著中特にシュレーデルの「漁業經濟論」を選びて紹介したる理由は、一には彼の著作が年代的に古いからでもあるが、又彼が該著以外に「企業及び企業者利得」並びに「政治經濟論」を著して經濟學の一般的研究にも關與してゐるからでもある。然るにも拘らず、彼の「漁業經濟論」の内容は、漁場の利用とこれに對する方策との研究に盡き、而もこれを以て學問的の基礎づけをなさむとしたと述べて、漁業の社會經濟的方面の研究は殆ど問題としてゐない。併し、理論的にせよ歴史的にせよ將又政策的にせよ、漁業經濟論の對象は實に一定の社會關係の内部に於て行はるゝ水界の漁業的利用生活であるから、社會關係を無視した漁場利用の研究のみを以てしては漁業經濟の半面を窺ひ得るに過ぎぬと言はねばならぬ。漁業に於ける社會經濟的關係を分析解明し、その發展の傾向を洞察することによつて漁業政策上の問題を捉へ來ることが、漁業經濟の研究領域に於て後學に遺されたる大なる主題である。地方人類の漁業生活に關する事象を對象とする研究も亦今や次第に分化し、漁場の生産性やその利用經濟に關する研究は、専ら一獨立學科としての漁場論、養殖論若くは漁撈論等に於て取扱はれ、又その傾向が益々大ならむとしてゐるから、この點からしても、漁業經濟論は、正に社會

20) “Das unternehmen und Unternehmengewinn”; “Die politische Ökonomie.”
併し私は未だ此等の著書に接して、彼の經濟學研究を窺ふ機會を得ざること
を遺憾とする
因みに、諸學者の漁業論附録の参考文献表に Schroeder 斯の書の發見せざる
を不思議に思ふてゐる

纖維工業と労働

經濟論の一分科として、漁業に於ける社會經濟的の關係の研究にその焦點を置くべきであらうと思ふ。